

メタ表示と伝達

座 間 直 樹

1. はじめに

人間は、心の中に思い浮かぶ様々な表示を構築する能力を有している。一つは感覚的なものである。我々は、遠くにいる友人の声を心に思い出すこともできるし、桜が舞い落ちる様を思い描くこともできるし、今朝焼いたパンの匂いを頭に浮かべることもできる。また、故郷で食べた食べ物の味や、その時座っていたクッションの柔らかさを思い返すこともできる。これら全て五感に関わるものは、録音や、写真、絵画などで、我々は「表示」を与えることができる。一方で、我々は概念的、論理的なものにも「表示」を与えることができる。心に浮かんだ思考や意見を、発話の中で言語を用いて表すことができるのである。また、表示を与えられた思考や意見に、更に別の表示を構成する能力も我々は有している。友達が話した内容や、本で読んだ哲学の言葉、昨日受け取った手紙の内容に表示を与え、誰かに伝えることも、文章としてそれを残すこともできるのである。

言語によるコミュニケーションが成立するためには、聞き手にその言語を理解できる能力と、話し手の意図を推測できる能力の両方が備わっていることが必要である。この二つの能力は、人間の認知システムの中で独立した機能として発達しながら、言語によるコミュニケーションという特殊な状況で相互作用をなすと考える。前者は言語モジュールをなし、後者は心理学、哲学の分野で「心の理論機構」(theory of mind) と呼ばれ、これも

一つのモジュールとして捉えられるといわれている。感情、欲求、知覚、意図、信念、思考、推論などを司る心の理論機構は、自分が感情や欲求、意図や信念をもっているとは自覚したり、他者が自分と異なる「心」をもっていることを推測したりすることができるようにするシステムである。この「心の理論機構」が正常に機能している場合、人間は外界の認知的な情報を表示として形成する。子どもの表示能力は、まず外界の出来事を捉えるための一次的表示からスタートし、次に自己の内部からの刺激（知覚、信念など）を捉える二次的表示を形成できるようになり、更により高次の表示を形成することが可能になる。二次的表示を含め、高次の表示は「メタ表示」(metarepresentation) と呼ばれている。メタ表示機能は、発話理解に不可欠な要素であり、逆に伝達において話し手は聞き手のメタ表示能力を利用することができる。

メタ表示能力は大きく三つに分けることができる。(1), (2) を見てみる。

- (1) I got the letter.
- (2) a. Mary believes that I got the letter.
b. Mary said that I had gotten the letter.
c. It is true that I got the letter.

メタ表示はある一つの表示としての低次表示 (lower-order representation) にさらにもう一つの表示、高次表示 (higher-order representation) を与えたものである。(2a)~(2c) は (1) の発話を低次表示として、高次表示に埋め込まれたものであるが、(1) のオリジナルの発話を包む表示を与えるための言語形式によって区別される。高次表示は一般的に話し手の発話や思考、信念である。それに対して、低次表示は、必ずしも話し手のもしくは第三者の発話や思考そのものでない。(2a) は信念を、(2b) は発話を、(2c) は命題をそれぞれ表示することになる。この三つの低次表示と高次表示との関わり合いによってメタ表示能力は分けられる。低次表示が信念を表示する場合、その表示は心的表示 (mental representation), 発話である場合伝達的表

示 (public representation) になり、命題や文である場合は抽象的表示 (abstract representation) として区別する。

(2) の各発話は、オリジナルの (1) の発話の内容を伝えるために表示を与えられたものであるが、このほかにもいろいろな方法で表示を与えることが可能である。(3) を見てみよう。

(3) Mary said, "She got the letter."

直接引用文である (3) において、話し手は聞き手に、言語形式的にオリジナルの発話と引用個所にかなり「類似性」(resemblance) があることを示すことができる。Mary が実際に言った言葉を忠実に再現することで話し手は、聞き手に、話し手でなく Mary 自身の考えを伝えていることを明示的にしている。メタ表示とは、このようにオリジナルの発話との類似性があることに特徴がある。しかし、その類似性が明示的でない場合もある。

(4) Jane : What did Mary say?

Peter : Leave me alone.

(3) では Mary said があり、何よりもメタ表示の部分が引用符によって表されているので、(3) の話し手は、"She got the letter" の部分が Mary の言ったことがあることを明示的に示している。一方、(4) の Peter の発話は Peter のものであるかどうかは明示的にされていない。このような場合、それを引用と取るか、または話し手自身の考えの表明と取るかは聞き手の判断に委ねられることとなる。すなわち Peter の発話は (i) Jane should leave Peter alone. (ii) Mary said that Jane should leave Mary alone. の二つの解釈が可能であり、話し手の意図した意味はコンテキストの中で聞き手の推論によって復元されることになる。(ii) の解釈は Mary に帰属する内容であり、一方、(i) は話し手 Peter の考えの表明として解釈される。(ii) のメタ表示に対し (i) は一次的 (記述的) 表示である。(4) の例が示すようにメタ表示には、表

示的不確定性 (representational indeterminacy) がつきものであり、極めて一般的現象でもある (Wilson 1999)。

関連性理論では、メタ表示は言語形式的にせよ、または内容的にせよ、オリジナルの発話と低次表示との間に類似性があるとしている。本論文では、(3)、(4) のような類似という概念を利用した表示として最も典型的な例である引用について考察するものである。第 2 章では、関連性理論の枠組みを紹介する。関連性理論の柱である情報意図と伝達意図の原理に基づき、メタ表示の不確定性について触れる。すなわち (4) の二つの解釈に見られるような発話を、出来事をありのままに表示する「記述的用法」と、人の意見、考えを話し手が解釈し、それに表示を与える「解釈的用法」を区別し、後者、つまりメタ表示における類似性について考察する。第 3 章では、2 章であげた関連性理論の手だてを用いて、実際の引用文の分析をデモンストレートする。直接引用のようにメタ表示であることが言語形式的に明示されているものの他に、間接引用、純粹引用 (言及)、混合引用などを取り上げる。その中で、それぞれの引用への話し手の帰属性に注目し、心的表示、伝達的表示、抽象的表示と関連付けてこれらを考察していく。

2. 関連性理論と言語的メタ表示

この章では、関連性理論のアウトラインを示す。また、発話解釈における不確定性を説明するために、関連性理論がどのような一般的解釈に関する方法を提示しているかについて触れる。

2-1-1 関連性理論の外形

関連性理論とは、Dan Sperber & Deirdre Wilson (1986/95) によって提唱されたコミュニケーションと発話解釈に関する語用論モデルである。この理論は、言語能力と非言語能力とは、認知のメカニズムにおいて明確に区別されるとする「心のモジュール観」を基盤とし、発話の語用論的解釈は、

聞き手の心的表示に対して操作された演繹的推論メカニズムであり、その操作は「関連性の原理」と呼ばれる単一原理によって支配されていると考えるものである。

人間は多様な現象を対等に扱わず、ある特定の現象に他の現象よりも注意を多く払う傾向がある。さらに、人間は現象を処理する時、あらゆるコンテキストを参照するのではなく、特定のコンテキストを選択し、その中で処理しようとする。関連性理論は、人間のこういった選択を可能にする時に必要となる概念を「関連性」(relevance)にあるとし、次の原理を仮定する。

(5) 関連性の認知原理 (第1原理) (cognitive principle of relevance)

人間の認知系は、自分にとって関連ある情報に注意を払うようにデザインされている。(Human cognition tends to be geared to the maximization of relevance.) (Sperber & Wilson 1995, 262)

当該の情報が「関連ある」(relevant)、つまり関連性を有するとはどういうことか。次の三つの場合を区別する。

- (6) a. 既成の想定と結び付き文脈的含意をもたらす場合
- b. 既成の想定を強化する場合
- c. 既成の想定と矛盾し、これを削除する場合

今、ある人が朝起きて窓を開けたところ、(7)の事実に気づいたとしよう。

(7) 今日は台風である。

もしその人が昨晚寝る前にベッドの中で、(8)のように考えていたとしよう。すると、(8)というコンテキスト情報と新情報(7)から(9)を演繹できる。

(8) もし明日台風が来ていれば、飛行機は飛ばないだろう。

(9) 飛行機は飛ばない。

(7) から導出される結論として解釈される (9) は (6a) の定義に当てはまるもので、(7) の文脈的含意であるといえる。この場合、(7) は (8) というコンテキストにおいて関連ある情報である、ということになる。

また、その人が朝起きて窓を開け、(7) 「今日は台風であろう」と考えていたとする。そこで、テレビをつけ台風情報を見たところ、やはり今日は一日中台風であるとキャスターが言っていたとすると、自らの考えを、テレビという客観的な、信頼できるメディアによって確認できたといえる。つまり、そのキャスターの言ったことは、(7) の既成の想定を強化するものであり、したがって関連性を有する情報である。よって (6b) の定義に相当するものと考えられる。(6c) のケースは次のような場合である。その人が、ベッドの中で目を覚まして周りの静けさから「今日はいい天気だ」と考えたとしよう。すると、起きあがってテレビから得た (7) という新情報は、既成の想定と矛盾し、(7) は既成の想定を退けるほど言質の強さがあり、その意味で関連ある情報ということになる。このように、既存の想定との相互作用には三つのタイプがあり、その人の認知環境に改善をもたらすことになる。これを認知効果 (cognitive effect) と呼ぶ。

しかしながら、必ずしも新情報が、認知効果をもたらすいかなるコンテキストにおいても、より高い関連性を生むわけではない。例えば、昨晚寝る前に (8) のように考えていた人が起きた時、窓を開け (10) に気づいたとしよう。

(10) 今日は台風であり、今外では子どもたちが遊んでいる。

この場合、(8) という既成の想定を仮定する限り、新情報 (10) は、情報 (7) と同様 (9) の文脈含意を導出し、関連ある情報ということになる。しかし、情報 (7) と情報 (10) を比較した場合、(7) がより関連性が高いことは明らかである。それは、(10) よりも (7) の方が、簡潔な情報であるため、発話処

理にかかる労力 (processing effort) が少なくすむからである。つまり、「関連性」は相対的概念であって、関連性には度合いがあり、(11) のように規定できるのである。

- (11) 認知効果が多いほど、関連性は高まる。また、そのような認知効果を生み出すために要求される処理労力が少ないほど、関連性は高まる。

人間の認知が関連性を目指しているということは、人間の認知体系は、認知上の処理労力を少なくし、より多くの認知効果を得るようにデザインされているということの意味する。

2-1-2 最適関連性

関連性理論における最も基本的な想定は、「人間は、情報処理に当たって最大の関連性 (maximal relevance) を目指す」、「しかし処理労力はできるだけ節約したい」つまり「最小の処理労力で、できるだけ多くの認知効果を得ることを目的とする」というものである。関連性の認知原理 (第1原理) (5) が示唆しているように、話し手が聞き手とコミュニケーションするということは、話し手は聞き手に情報を提供しようとすることである (informative intention / 情報意図)。話し手が聞き手に何か情報を提供する時、その情報は聞き手にとって注意を引くに値する情報、関連性を有する情報であることを、一方聞き手側は期待するはずである。聞き手は、発話に関連性をもつはずだと想定する時はじめて、その発話に注意を払い、解釈しようとする。聞き手が発話を理解し、解釈するには何らかの努力を払わなければならないが、その発話が全く関連性のない情報であるならば、そのような努力は無駄になってしまう。一方、話し手は、聞き手の注意を引くつもりで発話している以上、話し手の能力と興味を両立する範囲で、できる限り関連性の高いものを伝達することを目指すはずである (communicative intention / 伝達意図)。コミュニケーションについて当ては

まるこの基準は、Sperber & Wilson によって、「最適の関連性 (optimal relevance) の基準」といわれ、(11) のように規定される。

- (11) a. 明示的な刺激 (発話) は、聞き手がそれを処理するための努力を払うに値する程度に十分な関連性を有する。(The ostensive stimulus is relevant enough for it to be worth the addressee's effort to process it.) (Sperber & Wilson 1995, 270)
- b. 明示的な刺激 (発話) は、話し手の能力と興味とを両立する範囲内で、最も高い関連性を有する。(The ostensive stimulus is the most relevant one compatible with the communicator's abilities and preferences.) (Sperber & Wilson 1995, 270)

(11a) が言うことは、聞き手は、発話を処理する際、少ない労力で聞き手の注意を引くに値する十分な認知効果を得ようとする、ということである。また、(11b) は、話し手が可能な限り努力したとすれば、同じ認知効果をより経済的な仕方で達成できるような他の発話は存在しない、ということを行っている。この「最適関連性」の概念を用いて、関連性の第 2 原理が規定できる。

- (12) 関連性の伝達原理 (第 2 原理) (communicative principle of relevance)
 全ての意図明示的伝達行為は、その行為が最適の関連性をもつ旨を自動的に伝えている。(Every act of ostensive communication communicates a presumption of its own optimal relevance.)
 (Sperber & Wilson 1995, 271)

(12) の言わんとしているのは、話し手の伝達意図が明示的である場合、話し手は「話し手の発話から聞き手が (正当化されない処理労力を負うことなく) 十分な認知効果を導出することができるだろう」という信念を伝えている、ということである。(5) は人間の認知一般に当てはまる原則である

が、一方 (12) は発話解釈を律している原則である。

では、これまであげた関連性理論の基本原理を踏まえた上で、(4) を思い起こしてみよう。

(4) Jane : What did Mary say?

Peter : She got the letter.

(4) のような場合、Peter の発話を引用と取るか、または Peter 自身の考えの表明と取るかは聞き手の判断に委ねられることとなると述べた。このような聞き手の解釈における不確定性は、どのように解消されるのであろうか。(11) 及び (12) に従えば、聞き手は、最小の処理労力で最大の関連性を得ようとするものであるから、Jane の「Mary は何と言ったか」という問いに対して Peter の答えた、“She got the letter” を、Mary が言ったことだと考えることが、聞き手にとって最も処理労力が少なく、関連性が高いといえる。

しかしながら、注意すべきは、このような最大の関連性という概念は全てのコミュニケーションの場面に当てはまるものでないということである。第一に、話し手は、聞き手にとって最大の関連性のある情報を有していないかもしれない。また、第二に、仮に、話し手が聞き手にとって最大の関連性のある情報を有していたとしても、何らかの理由でそれを聞き手に提供するわけにはいかないケースも珍しくない。(4) では、Peter は、Mary が言ったことを、社会的もしくは個人的な理由で、聞き手に伝えたくないと考えていることも十分に考えられるのである。このような場合、聞き手は認知効果の点で最大に関連性のある情報を期待することはできない。また、聞き手は処理労力の点でも最大の関連性のある情報を得るとは限らない。話し手が聞き手にとって最も処理労力のかからない発話をするにはある種の技能が必要であるが、その技能をもっていたとしても、状況によってその時急いでいたり、疲れていたりしていたらその種の技能は十分に発揮されないこともある。このように、認知効果の点でも、処理労力の点においても、発話が必ず最大の関連性を有するという保証はない。しかし、話

話し手が聞き手に何らかの情報を与えようとすることは、話し手の能力と興味 の範囲内で、できるだけ関連性の高いものを目指すはずである。すなわち最適の関連性を目指すということである。

2-2 解釈と記述

言語形式そのものがもつ意味と、話し手が意図する意味とが異なるものは多々存在する。発話のほとんどがそうであるといっても過言ではない。文の意味と話し手の意味の間には、ある意味で体系的隔りがある。文は典型的に多義であり、一義化される必要がある。指示表示は指示対象を同定されなければならない。話し手の意味は他にも多くの方法で確立されているとはいいがたい。発せられた言語表現は話し手の意味には程遠く（時としてそのギャップは極めて大きく）、発話としての意味に至るには多くの作業が含まれる（Carston 2002, 武内 2002）。そのギャップを埋めるものは推論であり、発話解釈は言語的材料を基に、それを証拠として推論を働かせて得られるものだと関連性理論は説明する。これが表意と呼ばれるものであり、低次表示とみなすものである。一方、推論だけを基に解釈される話し手の意味を推意として区別する。

一般的に伝達に用いられる発話は、主として「話し手が真だとする出来事、状況、考えなどを記述し、正確に、文字通りに行われる」ものだと信じられていた。つまり発話のほとんどは物事をありのままに記述しているものと考えられていたのである。関連性理論では、発話を「解釈的用法」と「記述的用法」に分けて考える。以下の例を見てみよう。

(13) テーブルの上にケーキが置いてある。

(14) テーブルの上のケーキは妹の分だ（と思う）。

(15) 一郎（自分）は〈テーブルの上のケーキは妹の分でない〉と信じている。

(16) 一郎は〈妹が〈テーブルの上のケーキは妹の分でない〉と思っ

いる > と信じている。

(13) は、低次表示として出来事をありのまま、つまり「記述的」に表示したものである。この発話は、話し手が真だと思ふことに表示を与えたものであるが、話し手自身の信念の表明ではない。(14) も話し手が真だと信じている事象に表示を与えているものであるが、特に話し手自身が有する意見を表している。(13) や (14) のように、自らが真だと信じる事象に記述的に表示を与えるのを「記述的用法」という。(15)、(16) は話し手が、自分とは違う考えをもつものが存在することを認知し、自らのものでない第三者の考えや思考を「解釈」したものである。他人の考えに表示を与えることを「メタ表示」という。

メタ表示は、他人の考えや意見に帰属する (attribute) ことのできる能力によってその表示が大きく制限される。他人に帰属する能力が未成熟で、例えば (14) を信じている子どもは、(15) や (16) のような自分が信じている事象が真でない表示を含む表示はできない。(15) は、一次的に人の考えや意見を表示したものである。つまり、(15) の話し手は、自分の考えや意見と異なる他人のそれを表示しており、一方 (16) は、自分の意見とは異なる他人の考えについての第三者の意見を表示している。このようにメタ表示能力は人の意見や考えに帰属することで無限に表示を与えられるものだと考えられる。

次のシナリオとして、授業を欠席勝ちの学生 A が試験目前にして、心配そうな顔つきで先生のところにやってきたというとき、「君は真面目に出席していたから心配することないよ」と言われたとしよう。そのあとで、その学生が友人 B から「先生何だって？」と聞かれたとする。

- (17) (a) 先生は、「いつも真面目に出席していたから何も心配することはないよ」と言った。
 (b) 真面目にやっていたから心配することないって。
 (c) 救いようがないって。

(d) どうしようもない。

この (17a)~(17b) の例は全て A 自身の考えでなく、先生の考えを B に伝えようとしているのでメタ表示である。これら (17a)~(17d) は、大きく分けてオリジナルの発話や考えを正確に表したものと、それに対して自らの意見や解釈を加えて表示を与えられるものとに二分することができる。(17a) は先生が A に対して、ある発言をしたそのままの出来事に表示を与えた、「(かなりの程度) 正確に記述」されたものだといえる。よって、(17a) ~ (17d) の発話の中で、(17a) の発話が最もオリジナルの発話に対し類似性が高く、(17c), (17d) は最も低いといえる。(17a) において、A は自らの発話の表出命題を伝えているわけではない。直接引用文を用いることで、先生の発話に非常に似た発話をしたのである。顕在化したい事実（ここでは先生の発話）を模倣することによって、A は B にある命題を伝えている。直接引用文は、記述するものでなく、似ているものを表示するために用いられる発話の中では最も明らかな例である。また、(17) の一連の例は、発話が解釈的に、つまりメタ表示的に使われているということは、明示的にも非明示的にも伝えられることを示している。(17a) では、メタ表示の部分が言語的に明示されているのに対して、(17b), (17c) では、引用終助詞「って」によってやはり引用であることが示されている。極端な場合、(17d) のように引用であることが明示的にされないこともある。このような場合、それを引用と取るか、または話し手自身の考えの表明と取るかは聞き手の判断に委ねられることになる。ここでは聞き手である友人 B は「先生が何と言ったのか」と尋ねていて、その答えを期待しているのであるから、関連性の原則に従えば、(17d) を間接的引用と取るのが最も処理労力が少なく、認知効果も高い解釈であるといえるであろう。(17b) は先生の全発言の要約、例えば、先生は、他のある学生も先ほどテストを心配してやってきて、その学生より A は出席していることなどを話したとするならば、やはり先生の全発話に「類似した」記述ということになる。しかし、B は (17b) の発話から、(17a) とほぼ同じ情報を得ることができる。(17a), (17b) は、類似

性や正確度に多少の差はあるにしても、ともにありのままの出来事に表示を与えた、つまりそれを記述したものであるという点では一致している。

対照的に、(17c) は、(17b) 同様、終助詞「って」によって引用であることが言語形式的に示されているが、実際は先生の発話を言語形式として正確に、もしくは似た形で表したものではない。(17c) は先生の発話「君は真面目に出席していたから何も心配することはないよ」から、A の頭に「先生は自分を救ってくれようとはしていない。落第させるつもりだ」もしくは、「真面目に出席していなかった学生は大いに心配する必要がある」または、「先生は自分に対してかなり突き放した態度をもっているようだ」などといった考えが浮かび、先生の言いたかったことはそういうことだと判断を下し、推意として得たこの解釈を B に伝えている発話である。同様に(17d) も、先生の発話に A が解釈を付け加え、それを B に伝えている。つまり、ある一つの表示(ここでは先生の発話)としての低次表示 (lower-order representation) にさらにもう一つの表示、高次表示 (higher-order representation) を与えたことになる。表示に表示を与える発話の方法を解釈的用法と呼ぶ。このことは、発話が必ずしも記述的に行われるものでないことを示していると共に、聞き手は、話し手がいつもありのままの出来事を伝えているわけではない、言い換えれば、話し手の解釈が付けられて発話されるものがあることを認知しているのだといえる。

解釈的用法は、程度に差があるにしてもオリジナルの発話に類似したものであると述べた。では、その類似点とは何なのか。おそらく言語形式的、知覚的、論理的、概念的、様式的など、その特徴は多岐にわたるであろう。(17a) のような直接引用文は、表面的な言語形式的特徴を際立たせている。一方、(17c) の間接引用文は、言語形式的に類似していないことは明らかで、意味的、論理的に類似点があるといえる。引用個所を言語形式そのまま、もしくは似た形で表したのではなく、話し手にとって最も関連性のあるものを聞き手が復元できると考えられるように解釈を与え、内容的に類似性を生むことで、聞き手の処理労力がかからないようにしているのである。また解釈的用法によって内容的に類似性があるということは、推意を共有

しているといえる。オリジナルの発話と引用された箇所との類似点は論理的、文脈的推意である。上の例では、先生の発言「君は真面目に出席していたから心配することはないよ」から導き出される推意と、実際に A が発話の中で引用した (17c)「救いようがない」とが一致、もしくは類似している。

ここまで発話を便宜上「記述」と「解釈」とに分けて話を進めてきた。しかし、人の考えや意見、思考に表示を与える場合、自らの考えを全く織り込まずに行うことは、実際ほぼ不可能である。話し手の考えが多少なりとも加味されてしまうと考えるほうが現実的であろう。また、どれほど正確に、記述的に表示を与えたとしても頭の中の思考を表示する限り、表示されたものは思考の正確な記述とは言い難い面もある。つまり、自分の思考を表示するときも言語形式に乗せたものが「正確に」記述的に話し手の思考を表示しているとは「正確に」はいえないであろう。よって、記述的用法というのも、大きい視点から見ると全て解釈的用法だといえる (Sperber & Wilson 1986/95, 232) のである。

3. 引用の分析

これまで触れてきたように、メタ表示とは話し手の思考や信念を伝えるものでなく、他人の発話や、信念を伝えるものである。この章では、他人の発話や信念を伝える最も顕著な例である引用を取り上げ、それらをいくつかのタイプに分け、分析していく。そのタイプは純粹引用、直接引用、間接引用、混合引用など多岐にわたるが、これら全てはオリジナルのものに表示を与えるために使用されている。そのオリジナルとしての低次表示は、三つの種類が区別される (Sperber 2000; 第 1 章参照)。

(19) 低次表示の三つの種類

a. 抽象的表示 (文, 命題)

- b. 伝達的表示（発話）
- c. 心的表示（思考）

これら三つの表示に関わる引用は，オリジナルのものと同一の表示を与えているのではなく，類似性を持ったものに表示を与えていると主張したい。その際，引用個所がオリジナルのものと，どの程度類似性をもっているか，また聞き手がどのように引用の存在を認知するのかについて考察していく。またここであげた三つの低示表示への話し手の帰属性に注目し，その関係を探る。

3-1 言及

引用は，これまで二つのタイプに分けて議論されてきた。一つは「言及」(mention)，もしくは「純粹引用」(pure quotation) と呼ばれるもので，もう一つは「話法」(reported speech) である¹⁾。前者は，抽象的な文や命題に表示を与えるものである。ここで使う言及とは，解釈的用法である言及の中で，特に話し手が言及した部分に帰属しないものを指す。(18) と (19) を比べてみよう。

(18) “William” is a common name.

(19) “William” is my cousin.

(18), (19) では，共に “William” という人の名前が引用されているが，(18) が言及にあたるものである。(19) での “William” の引用の仕方は，“William” という人物が存在することを前提とし，その人柄や背格好など，その人物の特徴全てを包んだ表示が与えられているものである。(19) は記述的用法である。一方，言及にあたる (18) の引用は，“William” という抽象的な人の名前を言及したもので，実在する特定の “William” を指しているわけではない。前者は，特定の人物を示しているのです，その単語に帰属

して表示を与えられたといえるが、後者は、抽象的なレベルで表示を与えられているので、その単語の意味には帰属していない。

次に (20) を見てみよう。

- (20) a. Let's listen to "Yesterday".
 b. "Yesterday" has nine letters.
 c. "Yesterday" is an adverb.

(20) において、いずれの "yesterday" も抽象的な言語情報として表示を与えられている。(20a) は、曲の題名を、(20b) は、正書法の形式を、(20c) は文法的範疇をそれぞれ表しているが、単語それ自体がもつ意味には帰属していないことが分かる。つまり、"yesterday" のもつ「今日の一日前」、「近い過去」といった、辞書的な意味には帰属していない。また、(20b)、(20c) では、"yesterday" の言語的特徴を、(20a) では、"yesterday" という曲目という抽象的表示を表すために用いられているが、特に、(20b)、(20c) のように、純粋な言語的性質である「綴り」のみを引用しているものを純粋引用という。これに対して、(20a) は (18a) と同様、その単語がもつ意味には帰属せず引用しているもので言及と呼ばれる。言及は、引用した箇所に対して帰属しないもの全てを指すものであるので、純粋引用も言及の一つであるといえる。

(18)、(19)、(20) では単語の言及をあげたが、この他に文や句も言及されることがある。

- (21) "Kick the bucket" has three words.
 (22) "Shut up" is rude. (Wilson 1999, 436)
 (23) "So many men, so many minds" is a sentence of English.

(21)~(23) は、文や句、または諺を言及したものであるが、これらも全て引用箇所のもつ意味に帰属していない。(23) のような諺を含む表示であって

も, “So many men, so many minds”, 「十人十色」のもつ「人の好むところ, 思うところ, なりふりなどが, 一人一人みんなちがうこと」という意味には帰属されないで, 引用されている。

純粋な言語の特性である綴りを言及したものを純粋引用と呼ぶとしたが, これは言語形式的な特徴に関わるものである。一般的に, 言及は常に形式的な特徴に表示を与えるものと考えられているが, (22) のように, 文の「内容」を言及する場合もある。(22) で言及されているのは, 引用部分である “Shut up” の言語的特徴 (命令文であることや, shut は四つの綴り字からなる) ではなく, 「黙れ」という意味内容である。同様に, 内容を言及している例として (24) を見てみる。

(24) “John is another Einstein” means “John is a fool”.

(24) で二つの文が言及されているが, 言及されているのは両者とも言語形式でなく, その内容である。“John is another Einstein” の表層的な言語形式を言及しているのではなく, 「John はアインシュタインのようである」という意味を言及しているのである。このような意味や内容の言及は, 抽象的な言語情報に表示を与えているという点で, 言語形式の言及と何ら変わりはないといえる。

内容を言及したものでより明確な例は, (25) のような, 指示代名詞などを含み, 明示的に命題が潜んでいることを指示するものである。

(25) On this occasion, “She was there then” expressed the proposition
“Mary was in the kitchen on the 24th of February, 2002.”

この発話の前半の引用で言及されているものは, “she”, “there”, “then”が, それぞれ「誰」, 「どこ」, 「いつ」を指すのかということである。つまり代名詞の指す内容が言及されているのである。

これまで見てきた言及に関する例文は, 全て言語的に言及であることを

示すマークを伴うものである。(24)では、“means”が、(25)では“expressed the proposition”が、それぞれ言及であることを示すマークだといえる。しかし、そのマークが欠けている場合でも、我々はそれが引用であることを推論する。特に会話など、明示的な引用符が存在しないケースでも、ほとんどの例が引用と理解されるであろう。ある人が、本の目次を見ながら(26)を発したとしよう。

(26) There is no theory, only thought.

(26)の発話は、一見引用であるようには見えない。引用符もついていないし、言語的にも(24)、(25)のように引用を示す語が含まれていない。しかし、(26)の話し手が、“theory”という見出しを探していたとすると、“theory”と“thought”は言及されているといえる。たとえこの発話が、会話の中で発せられ引用符がなくても、それが言及されていることが聞き手には伝わるであろう。このように、言語的に明示的に引用であることが示されていなくても、聞き手は推論によって正しい解釈へ到達するのである。

この節では、純粹引用と言及の使用に関する様々なタイプを見てきた。言及とは、埋め込まれたオリジナルが抽象的な言語情報であり、言及されるのはその言語形式だけでなく内容であることもある。また、話し手は引用した部分には帰属しない。これに対して次節では、引用の中で、話し手、もしくは第三者に帰属した発話や思考に表示を与える話法を取りあげる。

3-2 話法

引用の種類のもう一つは、第三者に帰属した発話や思考に表示を与えるための発話である話法である。伝統的に話法は、直接話法 (direct speech)、間接話法 (indirect speech)、自由間接話法 (free indirect speech) の三つに区別されてきた。

3-2-1 直接話法と間接話法

直接話法とは、(27)に見られるようなオリジナルの発話の表層的な言語形式そのままの表示を含む引用である。

- (27) a. Peter to John: Leave me alone here.
 b. Mary: Peter said, “Leave me alone here.”

(27a)の発話をオリジナルとして(27b)が発せられたとすると、(27b)のMaryの発話は、Peterの発した通りの言語形式で報告しているといえる。命令文の形は崩れずに、時制を表す動詞、人称代名詞の“me”，直示的な“here”もそのままの形で引用されている。

直接話法に対して、間接話法は表層的な言語形式でなく、オリジナルの内容を再生した表示を含む引用である。間接話法では、(27a)のPeterの発話は(28)のように報告される。

- (28) Mary: Peter told John to leave Peter alone there.

(28)でMaryは、Peterの発話の内容を報告しているのである。その際、命令文は平叙文に、“me”という人称代名詞は“Peter”に、“here”は“there”にと、それぞれオリジナルの発話とは異なった表示が与えられている。同様に時制も、間接引用の場合違った表示が与えられることがある。(29)を見てみよう。

- (29) a. Peter: I am going to meet my father at the station.
 b. Mary: Peter said that he was going to meet his father at the station.

(29)ではMaryが間接話法によってPeterの発話を伝えているが、現在時制の“am”は過去時制の“was”へとシフトされ、人称代名詞の“I”，“my”がそれぞれ“he”，“his”になっている。

ここであげた直接引用と間接引用の発話は、その発話が誰かの陳述であることを言語的に明示する“say”や“tell”のような表現下にオリジナルの発話が埋め込まれたものである。すなわち、その発話はオリジナルを発したものと帰属する。また、オリジナルは発話であるので埋め込まれた表示は伝達的表示である。(29b)でのMaryの発話は、(29a)のPeterの発話を低次表示として含む表現であり、Peterに帰属するものである。

3-2-2 自由間接話法

言語的に引用であることが明示されている話法をこれまであげたが、この他にもう一つ異なったタイプの話法がある。(30)を見てみる。

(30) Peter: What did Susan say?

Mary: I can't speak to you now.

(30)でのMaryの発話はある事象の状態を表すために、“I can't speak to you now”とMaryが言ったように解釈される可能性を含んでいる。しかし、聞き手が最も関連性の高い情報を得ようとすれば、「Susanは何を言ったのか」の問いに対して答えたMaryの発話を直接話法として解釈するのが妥当であろう。つまり、Susan said, “I can't speak to you now”と同等の情報を得るであろう。このように、言語的に引用であることが明示されていないが直接引用と同じ機能を果たす話法を「自由間接話法 (free indirect speech)」と呼ぶ。この「自由」という語は、陳述の帰属先が明示的に示されていないことを意味するものである。また、(30)のMaryの発話のように、明示的な引用の語を省略することによって直接話法が自由間接話法に変わることも当然のことのように考えられる。

しかしながら、明示的に引用の語が示されているときであっても自由間接話法として解釈される場合がある。(31), (32)を見てみよう。

(31) Mary to Peter: Do you have a car?

(32) Mary asked, did he have a car?

(32) は (31) のオリジナルの発話を低次表示として含んだ発話であるが、時制と人称のシフトを伴いながらも疑問文の形は保たれている。したがって間接話法でなく、自由間接話法としてみなされるのが妥当である。また陳述であることを示す動詞句は挿入として分析される。間接話法は、オリジナルの文のタイプを変え（疑問文から平叙文）、時制や人称のシフトが行われる。一方、自由間接話法は (32) のように文タイプは保たれ、人称や時制が変わる特徴をもっている。時として一般的な描写と間接話法とを区別することは困難である。このような場合、時制や人称のシフトが間接話法であることの指示物 (indicator) になることがある。(33) を見てみる。

(33) To-morrow was Monday, Monday, the beginning of another school week!
(Noh 2000, 16)²⁾

(33) において “tomorrow” は過去を言及するために使用されている。また、この発話が間接話法であることを決定付けているのは時制のシフトを受けた “was” である。

直接話法や間接話法を用いた発話の目的は主に「報告」である。オリジナルの発話をした第三者の言ったことや、考えを伝えるための発話である。しかしながら、(34) は第三者の言ったことや考えを伝える発話ではない。

(34) (Looking at Peter singing well)

Mary to Peter: You think you're the best singer in England.

この (34) の発話は Peter が思っていることを報告しているのではなく、Mary が思ったことを Peter に伝えている。埋め込まれた低次表示は Mary の思考、信念であり Peter のものではない。この発話は、Mary の思考、信

念に対する心的表示であり、話し手である Mary に帰属するものである。

これまであげた直接話法、間接話法、自由間接話法は、一つのある表示に別のもう一つの表示を与えるときに、その状況によって使い分けられるものである。(35)の一連のやりとりはこれを例示している。

(35) A: What did he say?

B: a. He said, "That's the way."

b. He said that that was the way.

c. He said, "Sorry, that's the way. You are not to blame."

d. That's the way.

(35) の B の発話は全て、同じオリジナルの発話から表示を与えるものである。これは全ての発話が言葉通りに再現される必要がないことを示唆している。言い換えれば、聞き手は必ずしも、話し手が引用を用いるとき、引用の部分がオリジナルの発話と一致する、あるいは同じであることを期待していないということである。

言葉通りに再現されない例は、他に次のようなものがある。(36) はある言語で発話されたものに別の言語で表示を与えられたものである。

(36) 昨日フランス人にフランス語で「駅はどこですか」って聞かれたよ。

この例では引用の部分がオリジナルではフランス語で発せられたと考えられる。直接話法であるのにもかかわらず、言葉通りに再現されていないこの発話が正当なものとして解釈されるのは、話し手が伝えたいのはフランス語の形式でなくその意味だからである。翻訳はいうまでもなく、オリジナルの言葉を正確に伝えるものではない。意味的、論理的に等しいと考えられるものに表示が与えられるものなのである。

話法についてここまで考察してきたが、ポイントは次の4つである。

① 間接話法、直接話法は聞き手に、オリジナルの形式もしくは内容に注意

を引くために使用されるものである。②引用であることは明示的にされることもあるが、明示的でない場合は推論によって引用であることが復元される。③引用は言葉通りに再現する必要がない。④埋め込まれた低次表示は一般的に思考、発話である。またその帰属先は話し手もしくは第三者である。

3-3 混合引用

次に、話法と言及が同時に起こる引用、混合引用 (mixed quotation) に触れる。(37) を見てみよう。

(37) My friends said “Birds of a feather” to make a fool of us.

(37) において、話し手は「友人が “Birds of a feather” と言ったこと」を話し手に伝えるとともに、その発話が諺であることも伝えている。つまり、友人が実際に言ったことに伝達的表示として表示を与えていると同時に、引用が諺であることを示すために抽象的表示としての表示も与えているのである。言い換えれば、諺 “Birds of a feather” を言及し、かつ実際に使用された “Birds of a feather” という内容を伝達しているのである。直接話法である場合、引用した部分の意味、内容は聞き手の解釈の過程においてあまり重要であるとはみなされない。「誰かが何かを言った」、「誰かがこう思った」など伝達的な態度が最初に伝わり、その内容は二次的なものとして処理される。しかし、混合引用では引用された内容が解釈の過程で大きな役割を果たす。(37) では “Birds of a feather” の意味、内容が言及されている以上、その役割が解釈の過程で無視されることはない。次に (38) を見てみる。

(38) My friends said that they would use “Birds of a feather” to make a fool of us.

(38) では、話法の中に言及が埋め込まれていると考える。間接話法である

(38) では、that 以下が伝達的表示として表示を与えられているが、伝達的表示の中に抽象的表示が含まれている。つまり、that 以下はオリジナルを発した“my friends”に帰属するものであるが、“Birds of a feather”の部分は抽象的表示であり、“my friends”に帰属するものではない。

また、混合引用の特徴は意味や内容の重要性だけでなく、言語形式の制約にある。(39)を見てみる。

- (39) a. Socrates said, “Know yourself!”
 b. Socrates said that we should know ourselves.
 c. ?Socrates said we should know “yourself.”

(39a) は、直接話法、(39b) は間接話法であり、(39c) は混合引用であるが、(39c) は英文として容認可能ではない。直接的に引用されている“yourself”は“we”に呼応しないからである。(39) は、ソクラテスの言った格言を引用するために表示を与えられたものであるが、(39c) でソクラテスの言葉を言及するためには人称の一致が伴わなければならない。このように、混合引用では文法的制約があるといえる。

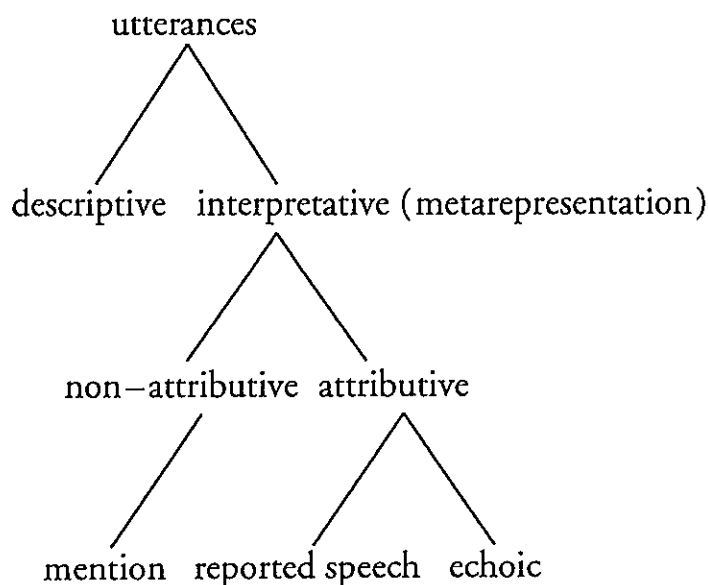
4. 結論

本論文では、関連性理論の概念を用いて典型的な引用（言及と話法）を分析してきた。これまで引用の研究では、主に「話法」に注目が置かれ、「言及」はほとんど考察されてこなかった。また、暗黙の想定として、引用はたとえそれが間接引用であってもオリジナルと同一の表示が再生されると信じられていた。しかしながら、本論文で考察してきたように、引用はオリジナルと同一の表示が与えられる必要はない。本論文では、引用はオリジナルと同一でなく形式的もしくは意味的に「類似性」があるものとして分析を進めてきた。また、引用を解釈する過程において「不確定性」が

あることも触れた。その発話が引用を含むものであるか、もしくは記述的に発せられたものであるかという不確定性は、関連性理論の情報意図という概念によって正しい解釈へ達することを主張した。

(40) の図で示されるように、本論文では発話を記述的と解釈的に分け、後者に当たる言及と話法の様々なタイプをあげ両者を比較対照してきた。解釈的用法としての「メタ表示」は定義上、「ある表示に別の表示を与える」ということである。言い換えると、メタ表示とは高次表示の中に低次表示が埋め込まれているものである。その低次表示は発話などの「伝達的表示」、思考や信念などの「心的表示」、命題や文などの「抽象的表示」として三つに区別した。さらに、言及と話法、両者に共通することはオリジナルに対する類似性であり、一方、相違点は話し手のオリジナルの発話に対する帰属性である。言及は抽象的なレベルで表示が与えられているので、その語の意味に帰属しないが、話法は伝達的、もしくは心的な情報に表示が与えられるので、話し手もしくは聞き手を含む第三者に帰属するものである。

(40)



本論文は、オリジナルに帰属する発話の中で、「話し手が何某があることを言ったことを思い浮かべており、それに対してある態度を抱いている」とする「エコー発話」(echoic)には全く触れていない。エコー発話に関し

ては、本論文を基に執筆を進めている修士論文（座間（予定））を参考されたい（さらに、Sperber & Wilson 1998 も参照）。また、メタ表示の分析において、より複雑な、また議論の余地のある問題としてメタ言語的否定 (metalinguistic negation) がある (Noh 2000; Carston 2002 参照)。メタ言語的否定は、記述的な否定と異なるもので、メタ表示的に使われる言語的材料が発話の内容の真理条件 (truth-condition) に大きく貢献することを示す顕著な例である。こちらもまた別の機会にぜひ触れてみたいトピックである。

注

- 1) ここでいう「言及」とは、Wilson & Sperber (1981) で区別された、「使用」と「言及」の「言及」にあたるものではない。Wilson & Sperber (1981) では、発話を「使用」と「言及」とに分け、前者を世の中の出来事をありのままに、「記述的」に表示を与える用法だとし、後者を「解釈的」に表示を与えるものとして定義した。
- 2) この例文は、Noh (2000) が^s Lawrence, *Women in Love*, 185 を引用したものである。

参考文献

- Blakemore, D. 1992. *Understanding Utterances: An Introduction To Pragmatics*. Blackwell.
 武内道子・山崎英一（共訳）. 1994. 『ひとは発話をどう理解するか』ひつじ書房.
- Carston, R. 2002. *Thoughts and utterances: The Pragmatics of Explicit Communication*. Blackwell.
- Noh, E. - J. 2000. *Metarepresentation*. John Benjamins.
- Sperber, D. 2000. Metarepresentations in an evolutionary perspective. Sperber, D. (ed.) *Metarepresentation: A multidisciplinary perspective*, 117-37. Oxford University Press.
- Sperber, D. & Wilson, D. 1986. *Relevance: Communication and Cognition*. (2nd edn., 1995) Blackwell. 内田聖二・中達俊明・宋南先・田中圭子（共訳）. 1993/99.
 『関連性理論: 伝達と認知』研究社出版.
- Sperber, D. & Wilson, D. 1981. Irony and the use-mention distinction. In Cole, P. (ed.),

- Radical Pragmatics*, 295-318. Academic press.
- Sperber, D. & Wilson, D. 1998. Irony and relevance: A reply to Seto, Hamamoto & Yamanashi. In Robyn Carston & Seiji Uchida (Eds.), *Relevance theory: Applications and implications*, 283-293. John Benjamins.
- 武内 道子. 2002. 「言語形式の明示性と表意」『英語青年』第 148 巻. 第 4 号. 240-241. (2002 年 7 月. 36-37.)
- Wilson, D. 1999. Metarepresentation in linguistic communication. *UCL Working Papers in Linguistic* 11, 127-61. Reprinted in Sperber, D. (ed.) 2000. *Metarepresentation: A multidisciplinary perspective*, 411-448. Oxford University Press.
- 座間 直樹. (予定) 「アイロニー表現とエコー発話」神奈川大学修士論文.